

＜しれとこ科学教室 第1回 開催概要＞

開催日時：平成23年7月25日（月）16：00～18：00

第1部 「根室海峡のスケソ漁 ～これまで、今、そしてこれから～」 講師：桜井 泰憲 氏

第2部 「地球温暖化と知床の水産業」 講師：牧野 光琢 氏

第3部 意見交換

場所：羅臼漁業協同組合

＜講座内容の概要＞

科学教室第1回目は科学委員会の海域WG座長を務める桜井泰憲先生と海域WG特別委員を務める牧野光琢先生にお話を伺いました。

第1部の桜井先生による講座では、様々な魚が水揚げされる羅臼の海が、今どのような状況にあり、温暖化が叫ばれるなか、これからどのように変化していき獲れる魚にどう影響するのかなどを、これまでの漁獲高などの実績を追いながらお話しいただきました。また、ベーリング海では2000年代半ばから寒冷化が起きており、結果的にスケトウダラにとっては今後良い状況になりえるというお話も聞くことが出来ました。さらに、海洋保護区についても触れられ、漁業を含めた海の持続的な利用が大切であることや、地域住民や漁業者が自主的に漁業の持続的利用のための取り組みを行なっている知床はすでに海洋保護区に等しい、というご説明もありました。

第2部の牧野先生による講座では、地球温暖化と羅臼の海の関係性をテーマにお話しいただきました。温暖化による知床の水産業と地域の暮らしへの影響について、具体的な魚種をあげたご説明のほか、これから増えると予想される魚種は、その増え始め時の資源管理がとても大事だというお話や、獲れた魚をいかにして高い価値をつけて消費者に届けるかなど、第1部同様、知床で漁業を営む漁師の方々にとって直接関わる興味深いお話でした。

参加者は56名と大盛況で、第3部の意見交換の場では実際に海に出て魚を獲っている漁師の方からの質問や意見が挙げられ、会場は最後まで盛り上がりました。

＜意見交換の内容＞

Q. 海洋保護区となった場合の具体的な規制などはないのでしょうか？

A. 保護区は禁漁区ではありません。保護区に設定するということは持続的な利用が可能な海を守り続けるということで、そういう意味ではすでに知床は保護区であるといえます。紙の上だけの海洋

保護区では意味がなく、むしろ漁業などにより海を使い続ける日本では、海洋保護区の積極的な設定に向いている場といえます。

Q. 東日本大震災により起こった放射能被害について、スルメイカについての影響がどうなのか心配しています。先ほどのお話の中で、羅臼沖で獲れるスルメイカは問題ない、とありましたが、本当に放射能の影響は無いのでしょうか？

A. 羅臼沖で獲れるスルメイカは太平洋の沖を通り、北方四島近辺の海で餌を食べて成長する個体群のため、餌から放射能を摂取するとは考えにくく、また、海流の関係から見ても、羅臼沖の魚は安全と考えて良いと思います。

Q. ロシアトロール船の操業が、羅臼でのスケトウダラの持続的な資源利用に大きな影響を与えていると思いますが、いかがでしょうか？

A. トロール船による漁業では持続的な資源管理は困難です。羅臼では丁寧な資源管理を実施していることを国際的にもアピールしていくことが重要だと思います。

<しれとこ科学教室 第2回 開催概要>

タイトル：「シカが知床の風景を変える」～エゾシカの急増と植生への影響～

講師：弘前大学白神自然環境研究所 教授 石川幸男（いしかわゆきお）氏

開催日時：平成23年8月17日水曜日 9：30～12：00

場所：斜里町岩尾別 フレペ遊歩道

<講座内容の概要>

しれとこ科学教室2回目は科学委員会委員であり、エゾシカ・陸上生態系と適正利用・エコツーリズムの各ワーキンググループ委員を務められている石川先生とフレペ遊歩道を散策しながら、実際に現場で科学委員会の専門家からエゾシカが植生に与えている影響について解説していただきました。

最初に鳥獣保護区管理センターにおいて、まず基礎知識として知床の植生とエゾシカが植生に与えている影響について、知床岬の風景の移り変わりの比較写真など、スライドを使って先生からレクチャーしていただきました。

その後、参加者16名と一緒にフレペの滝遊歩道を散策しながら、先生の解説を聞きました。植生調査とは実際にどのような方法でどのような項目を調べるのかといったお話や、エゾシカの影響がほとんどなかった1980年代初めや4年前に実施した調査の際と今回とでどのような変化が見られるかなどといった点、ハンゴンソウやキオンなどのキク科植物やワラビといったエゾシカの好まない植物が優占し、観察種数も限られ植生が単純化したこと、一方で場所によっては開花や種子をつけるまでには至らないものの、優占している植物の陰でひっそりと生き延びている種もいるなどといったお話をききました。

石川先生は4年前の調査に比べ、ワラビの勢力がさらに増している印象を受けたとのことでした。また先生の解説の中で、オオヨモギ、カラマツソウの仲間やナガボノシロワレモコウなどエゾシカに食べられ姿を消したと思っていた植物が、エゾシカの好まない草の下に小さくなりながらも次々と発見された時には、参加者の皆さんも地面に這いつくばって、どうにか生き伸びている姿を見てちょっとほっとする一方で、この状態でどれぐらいの年月持ちこたえていられるかは未知数という先生の言葉に、ちょっと複雑な気持ちになっていました。

ここ20～30年ほどの間に大きく変わってしまったフレペ遊歩道周辺の景観ですが、エゾシカによる影響を軽減すれば失われつつある植物が見られるようになり過去の景観を取り戻すことが期待できます。既にしれとこ100㎡運動地においては柵でエゾシカが入れない区域を作り景観再生の試みが行われ一定の成果が見られます。石川先生からは、遊歩道の隣接した一角を柵で囲ってエゾシカの

影響を排除し、遊歩道の散策者からも柵内外での効果を比較できる場所を作ってはどうかとの提案が
されました。

<しれとこ科学教室 第3回 開催概要>

タイトル：海と森のつながりを取り戻せ！～魚から見たよい川とは？～

講師：北海道大学大学院農学研究院 教授 中村 太士 氏

日時：平成23年10月15日土曜日 13:00～16:00

場所：斜里町岩尾別 イワウベツ川水系白イ川流域

<講座内容の概要>

しれとこ科学教室の第3回目は河川工作物アドバイザー会議中村太士座長とイワウベツ川河口から魚が遡上できるよう改良された白イ川の治山ダムまでを散策し、河川工作物の改良に至るまでの経緯と改良のポイント、改良後の効果について解説していただきました。

最初に知床岩尾別ユースホテルにおいて、河畔林と河川の関係性やサケ科魚類の遡上による陸域と海域の物質循環の流れ、川に設置された治山ダムや堰などの工作物が河川環境に与える影響、知床世界遺産地域内の改良対象となる河川工作物の選定・仕分けから改良工事実施に至るまでの経緯、改良後の効果と課題点、今後の取り組みなどについてスライドを使ってレクチャーをしていただきました。

基礎知識をレクチャーで学んだ後は、いざ現場へ。まず最初に、参加者13名とともにイワウベツ川河口にあるサケマス捕獲場を見学しました。ここには親魚を捕獲して人工ふ化事業用の採卵をするために魚止め堰が設置されています。以前はこの魚止め堰のため捕獲時期以外も自然遡上できない状態でしたが、現在では捕獲時以外は遡上できるよう改良されており、この改良を行った北見管内さけます増殖事業協会の増川さんにその仕組みについて解説していただきました。

その後はイワウベツ川から白イ川の工作物改良現場までを散策、斜里町の1基と北海道森林管理局の3基、計4基の改良現場を見学しました。一口に河川工作物と言っても、形状もさまざま、素材もコンクリートや鉄などがあり、改良方法もそれぞれ違います。中村先生から、改良工事のポイントや改良後の効果、今後の課題点などについて、お話を聞いた後、疑問点を先生に質問したり、みんなで意見をかわしたりしました。また、最上流の改良工作物のさらに上流側でシロザケを発見、工作物の改良によって、分断されていた川がつながり、海と森のつながりを取り戻されつつあることを実感しました。